

平成 28 年度

足立区地域包括ケアシステム推進会議

第 2 回認知症ケア推進部会

日時：平成 28 年 7 月 15 日（金）

場所：足立区役所 13 階大会議室 B

午後2時02分 開会

江連地域包括ケアシステム推進課長（事務局） 皆様こんにちは。定刻でございますので、ただいまから「第2回足立区地域包括ケアシステム推進会議 認知症ケア推進部会」を開催させていただきます。

本日は、お忙しい中、また足元が緩い中をご参加いただきまして誠にありがとうございます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます地域包括ケアシステム推進課長の江連と申します。よろしくお願いたします。

初めに、傍聴者の皆様にお願があります。会場内でのビデオカメラ、カメラ、携帯電話等の使用はお控えください。また、部会終了後は配付資料と名札を事務局にお返しただいてからお帰りください。ご理解とご協力をお願いいたします。

それでは、早速ですが、この会議は、足立区地域包括ケアシステム推進会議 認知症ケア推進部会設置要綱第6条第2項により過半数の委員の出席により成立いたします。現在、過半数に達しておりますので、部会は成立しております。

皆様から活発なご意見、ご質問をいただくためにも、迅速な会議進行にご協力いただきますよう、よろしくお願いたします。

なお、この推進会議の委員名や会議録などは、区民の方へ公開することとなります。記録の関係上、ご発言の前にお名前をお願いいたします。

初めに、新しい委員の紹介をさせていただきます。

本日はご欠席ですが、今年2月に区東北部認知症疾患医療センター長に就任なさいました松井先生に、前任の西島先生に引き続き委員をお引き受けいただくこととなります。

続いて、昨年度まで地域のちから推進部長でした井元委員が、ことしの3月31日をもってご勇退となりました。そのため、4月より地域のちから推進部長であります和泉委員が、前任の井元委員の任期を引き継ぐ形で就任となりました。和泉委員よろしくお願いたします。

和泉委員 和泉でございます。よろしくお願いたします。

江連地域包括ケアシステム推進課長（事務局） 次に、資料の確認をさせていただきます。

本日は、席上資料として配付しております。事前にご送付できなくて大変申しわけありませんでしたが、本日の「次第」、続いて「委員名簿」、「席次表」、資料1としまして、平成27年度の実績を載せております「認知症対策事業全体イメージ」、A3の紙一枚です。そして資料2としまして、「認知症高齢者が暮らしやすい先進自治体の活動事例について」、9枚綴りの冊子となっております。

資料はおそろいでしょうか。大丈夫でしょうか。

（資料過不足等：なし）

それでは、これから開催したいと思います。永田部会長、開会のご挨拶をよろしくお願いいたします。

永田部会長 皆さんこんにちは。永田でございます。

今月は7月で、本当に日にちのたつのが早いことを実感しているこのごろですけれども、今年度もこの部会を大切に、皆様と率直に意見交換をさせていただきながら、昨年度発足した部会ですが、きょうをきっかけにして、平成28年度に一步でも二歩でも足立区内の取り組みが本当の意味で推進されていくように、皆さんとできる限り意見交換をしながら、区内の動きにつながる提案を少しでもまとめていくことができればと願っています。

どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

江連地域包括ケアシステム推進課長（事務局） ありがとうございました。

本日は、諏訪副部会長が所用で欠席となっておりますので、このまま議事に入らせていただきたいと思えます。

それでは、以後の議事進行については、永田部会長よろしくお願いいたします。

永田部会長 それでは、皆様のお手元に、先ほどご説明のありましたA3横の「認知症対策事業全体イメージ」の表があると思いますが、それについて事務局からご説明をよろしくお願いいたします。

江連地域包括ケアシステム推進課長（事務局） それでは、認知症対策事業実績と、足立区の取り組みにつきまして、引き続き江連からご説明させていただきます。

A3の紙のイメージ図の上半分が「認知症の方とご家族の方を地域で支える地域資源の整備」ということで、施設や養成講座等の取り組みのことをうたっております。

真ん中のところは、左側が「元気高齢者」から、右側が「重症化患者」という流れになっておりますので、上下ともに、左側が軽い人から、右側が重い人まで対応する形の図となっております。

下の半分は、「ひとり一人の区民の方をサポートする取り組み」ということで、「もの忘れ外来」、「見守りキーホルダー」など、一人一人に対する支援部分のくりととなっております。

それでは、27年度の実績を踏まえまして、ご説明させていただきます。

左上の「認知症サポーター養成講座（オレンジリング運動）」は、正しい認知症の知識を区民一人一人につけていただきたいということで開始しております。昨年は119回、4,114人に実施しております。昨年は区内の警察署向けにこの養成講座を行いまして、認知症の方は徘徊したりすることもありますので、警察官の方に知識をつけていただくことができました。

加えて、「認知症サポーターフォローアップ講座」としまして、現在、サポーターはかなり多くいますけれども、実際にそのサポーターの方に何か役割があるのかということ、そこまでのものはなく、認知症の知識を得ることが目的になっておりますが、それでは、サポーターの方が1回の講義だけでそのまま

手を離してしまっているのかという部分がありまして、その中で、フォローアップ講座として、後フォローという形で3回に分けて引き続き講義を行っております。昨年は22名受講しまして、無事終了しております。

今年度の取り組みとしましては、認知症サポーターは、これまで地域包括支援センターを中心に行っているところですが、今の講座を開ける人材に限られておりますので、今年度は6月20日に「キャラバンメイト養成研修」としまして、このキャラバンメイト養成研修を受けると認知症サポーターの養成講座が開けるという形で、そういうグループワークも含めた講義を行いました。72名の方にご参加いただきまして、地域包括支援センターであるとか基幹の部分の方もいらっしゃいましたけれども、49名のケアマネジャーの方にもおいでいただきまして、ケアマネジャーの事業所でも認知症サポーターの養成講座を行い、今後さらに認知症サポーターをしっかりと増やしていく、認知症の知識をつけた方、区民を増やしていくということで取り組んでおります。

続きまして「認知症カフェの開設」ですが、これは平成27年の夏ごろから地域包括支援センターで行っておりまして、包括センターによってですが、月1回～2回行っております。24カ所のセンターで昨年は計100回実施しております。これに加えて大内病院さんですとか、各基幹のところでも、民間の事業所の中でも認知症カフェは行われておりますので、それ以上、実績としては、区全体としてはあると思っております。

地域包括支援センターの認知症カフェの参加人数は1,973名ということで、ここには認知症の相談に来る方、問題を抱えた家族の方も含めて、加えて民生委員の先生であるとか、下に書いてありますやすらぎ支援員さん、こちらは、認知症の方に接する研修を受けた方ですが、そういう方も含めて1,973名が参加しております。ですので、1回当たり大体20名前後は参加している計算となります。

その下で、「やすらぎ支援員の派遣」ということで、現在50名程度区内にいますけれども、実際に支援をされていた方が3名、支援回数としては15回となっております。

続きまして「オレンジマップ」ということで、これも各地域包括支援センターが作成するもので、これは認知症専門員が各家庭を訪問するときに、包括支援センターごとの認知症施策、介護施策に関する『ハンドブック』という形で説明材料としてつくったものになります。これも平成27年度につくりました。きょうは資料としてお持ちしたかったのですが、センターごとに1冊ずつあるので、全部のセンターをまとめると4、5センチになってしまうので、今回はお持ちできなかったのですが、機会がありましたら、また参考としてお出ししたいと思っております。

残り3つが、認知症に関する施設になります。「認知症対応型の通所介護」ということで26事業所、定員が346名です。「介護老人保健施設」が14施設、定員が1,717名です。「特別養護老人ホーム」に関

しましては、現在 23 施設、定員で言いますと 2,443 名あります。「認知症高齢者グループホーム」もこちらも区内に 34 カ所、定員が 614 名ということで、69 ユニットです。このユニットは、1 フロアに大体 8 ~ 10 室ぐらい部屋がありまして、そこに対して 1 ユニットとなっておりますので、大体 10 分の 1 のユニット数となっております。

下の、「ひとり一人の区民の方をサポートする取り組み」をご説明させていただきます。

一番左側が「介護予防教室」、こちらは地域包括支援センターで行っておりまして、認知症に関する介護予防教室を 201 回行っております。こちらは脳トレであるとか、認知症に関する講義などを行っております。その他「家族介護者教室」も行っております。

続きまして、「介護予防チェックリスト」ですが、昨年は、65 歳以上の要支援、要介護の認定を受けていない方、全員に送っております。足立区では、現在 16 万 6,000 人の高齢者がおりまして、約 3 万人強が介護認定を受けていますけれども、その受けていない残りの 13 万余に送付しました。回収率は大体 60% で 7 万 9,000 人の方から回答を受けております。

チェックリストの項目がたくさんありますけれども、その中で、認知症の可能性があると判定された方が、男性が 7.6%、女性が 5.3%、合わせて 12.9% ですので、1 万人強の方が認知症の可能性があると判断されています。。その中で認知症のハイリスク、設問によってもリスクがありますので、それを精査した中でハイリスクであるという方に関しまして、各包括支援センターにおります認知症専門員が訪問して確認するという事業を行っております。こちらの対象が 3,951 人、これはチェックリストの回答が来て、返してからの訪問となりますので、昨年は 11 月から訪問を開始しまして、3 月末で 1,773 人、実績として半分ぐらい出ております。その後、4 月、5 月、6 月と訪問を続けておりますので、数字の確認はまだできていませんけれども、今、約 2,000 人弱の訪問が完了していることとなります。

今年度も、介護予防チェックリストは 7 月の頭に第 1 回締め分けの分を各高齢者の方に配付しております。その中で認知症の危険がある方につきましては、ことしも引き続き訪問を実施していきたいと思っております。

介護予防チェックリストは、今年度から 3 分の 1、今までは 65 歳以上の未認定者全員でしたけれども、これを 3 年に分けて一通りやるということで、今回から 3 歳おきに対象者を絞らせていただきました。ですので、今回は 6 万 ~ 7 万人に送付しております。

続きまして、「もの忘れ相談事業」ですが、こちらは各地域包括支援センターで、年 4 回ずつ計 100 回行っております。こちらには区内のもの忘れ相談医の先生にご協力いただきまして、専門医の立場からも相談を受けているということで、相談者数が 240 名になります。

続きまして、「認知症の人の在宅生活を支援するケアプログラム推進事業」ということで、こちらが今

年度から実施しているものになります。東京都医学総合研究所が東京都から委託を受けてモデル的に認知症施策について研究をする事業になっております。東京都の中で、世田谷区、武蔵野市と足立区の3市区がモデル的に実施しているものであります。

こちらは認知症高齢者に対する接し方で周辺症状が落ち着くということで、スウェーデンで行われている事業ですが、それを日本でもモデル的に取り入れまして、そこで実績がしっかり確認できたら、ほかにも広げていくということで、モデル事業として足立区が手を挙げて参加しているものです。大体100名弱がこのモデル事業の対象の高齢者ですが、その中で72名の方が足立区から参加していただくということで、足立区の居宅支援事業者の皆様のご協力を得て今回行うことになっております。

続きまして、「東京都認知症疾患医療センター（大内病院）のアウトリーチ」の件数になります。こちらが、昨年1年間で11名、延べ32回の訪問を行っております。昨年は比較的下半期にこの相談が多くありまして、入院であるとか医療機関につながったもの、自立しているのが5名の方、6名に関しては、今年度も引き続き支援を継続しております。

最後に「見守りキーホルダー」と「あんしんプリント」となります。こちらは、認知症の徘徊の方に対応する事業です。27年度の見守りキーホルダーによる連絡、保護が14件ありました。現在、今年度の分も含めると22件まで、この数字が伸びております。現在、見守りキーホルダー1,088個を区民の方に配付しております。あんしんプリントにつきましては、下着のところに見守りキーホルダーの番号を印字して、もし徘徊したときに、何も身分を証明するものを持っていなくても、下着のところから確認ができ足立区に連絡が来る、こういう事業になります。現在130名の方がこの事業を利用しております。

以上が、足立区内における現在の取り組み状況になります。よろしく願いいたします。

永田部会長　ご説明ありがとうございました。

去年お聞きしたところからまた……、昨年度の実績、そして今年度の新たな事業ということで、今、足立区では非常に多くの事業が同時並行で動いていて、きょうお越しの方たちも、これにかなり関与されて一緒に進めていらっしゃる場所もあるのではないかと思います。

今の足立区の全体のイメージをもとにしながら、きょうのこの後の討論でも、これに向けて、それぞれのお立場で何ができるか、ご意見のやり取りをさせていただきたいと思っておりますけれども、その前に、今年度の足立区の取り組みの参考にさせていただくために少しだけ全国の状況について、参考情報を私からお伝えさせていただきたいと思っております。

お手元にホッチキス止めの資料があると思っておりますので、ご紹介させていただきます。

（「認知症高齢者等が暮らしやすい先進自治体の活動事例について」）

正面のスライドは、皆様のお手元の資料と同じですけれども、小さな写真があります。これは、足立区の夏はどのような状況なのかというのをネットで調べさせていただいたら、7月、8月にかけて足立区は夏祭りが各町内であるということでした。「夏の風景」と調べたら、足立区で夏祭り開催の情報がいっぱいありました。

なぜこのような写真をお借りしてきたかという、認知症の人を地域で支えるとかネットワークづくりに、従来の医療と介護も、もちろん大事ですが、加えて、町が生きていて、町にある、既にあるいろいろな資源だとか、町で人が集まる機会だとか、あと、ずっと長年足立区で取り組まれている行事、これを支えているたくさんの方がおられたり、もともと足立区にあるものを大事に生かしながら、そこに、認知症への取り組みをそっと加えていくことができるかどうかによって、層が広がったり、関心のない人に広げていく上での大事なポイントの一つではないかと思ひまして、足立区にどのようなものがあるか、認知症のサポートにつなげるものがあるのではないかと探してみ、こういうお祭りはどこにでもあるのではないかと探してつけさせていただきました。

(「つながり、支え合う仲間を増やしながら……」)

最初に脱線から入ってしまいましたが、次のスライドを見ていただきますと、これは去年の部会のごときにもご紹介したスライドです。お手元にあるものと同じなので、ちょっと小さくて見にくくて恐縮ですけれども、認知症の症状が出始めてから亡くなるまで、非常に長い経過をたどります。東京都の以前の調査ですと、平均12年半ぐらい、12年半も平均ですので、より長い方もおられて、認知症といっても決して一律ではなく、初期段階もあれば中盤もあれば重度の段階、そして亡くなる段階もあり、その時期に応じた適切なつながり、支援が必要になってくるということを模式的にあらわしたのですが、現段階では、認知症に関する理解と支援、そしてつながりが不足しているために、必要以上に状態を悪化させている人が多い。正面の図で言うと赤い線をたどらざるを得ない人が多い。

地域のつながりをもっと強化して、初期のころからしっかりとした関係者の理解と、あと本人と家族に合った支援、それらを強化していくことで、実は発症してからも状態を落とさずに生活を維持したり、地域の中から疎外されずに地域の中で暮らし続けることができる。正面のスライドですと青い線ですね。認知症を発症しても状態を保ちながら暮らし続けられる、この青い線をたどれる人をどれくらい増やせるかということですね。今、全国の中でも、地域づくりだとか認知症の取り組みを自治体が進める大きなねらいは、事業を増やすことよりも事業を通じて長い経過をたどれる人をお一人でも多く増やそうというところが一番の目標の点だと思います。

そうした意味で、足立区の医療関係者、地域包括支援センターや介護事業者、そして自治会の方たち、老人クラブの方たち、シルバー人材センター等、あるいはさまざまな区民の方たち、住民側の組織の方

たちの動きと、医療、介護の専門職が四つに組みながら、認知症になった一人一人、本人と家族を支えていく体制をいかにつくるかという部分も、これからはただただ増やすというよりも、あるものがつながりあって、一人一人がたどる経過をしっかりと継続的に支える体制づくりが今、大きな焦点になっているところではないかと思います。

「認知症になってからでは遅過ぎる」とさえも言われているぐらいに、この取り組みは、認知症になってからの人だけを対象というよりも、先ほども介護予防教室という話もありましたが、この図で言うと一番左下の「元気な頃からの仲間」をどのように増やしていくか、孤立せずに元気なころから地域の中で仲間を増やす。それも単に楽しい仲間というだけではなくて、認知症ということから目を背けずに、自分たちが認知症になってからもつき合い続けよう、認知症になってからも隠さずに、生活のしづらさや変化が出始めても隠さずに周りに言えたり、周りがそれに気づいたときに冷たい目で排除せずに、症状が起こり始めたころに支え合う仲間、地域の中で暮らし続けられるように支え合う仲間を増やし、これを住民さんだけに頑張らせずに初期段階から介護事業者や医療関係者もしっかりと地域の中で活動しながら、認知症が進行しても地域の人たちが大切な生活仲間としてつながり続けていくことを専門職も支えていく。専門職と地域住民が一体となって、長い経過をどれだけ支えていけるのか、地域全体の人たちの総力戦のような取り組みが、今、足立区でも始まってきているのではないかと思います。

（「認知症になっても暮らしやすい町づくりが進展して……」）

次のページを見ていただきますと、いろいろなアプローチがあると思いますけれども、1番にお示したのは、今、全国の市区町村、どの市区町村でも「認知症に優しいまちづくり」が非常に活発になって年々進んできておりまして、その共通のものは何かということで進捗状況を、取り組みの事例調査がなされていまして、その中から浮かび上がったものとしてご参考にしていただきたいものですが、推進していくための「重要方針」として、関係者が、ただただがむしゃらに頑張るのではなくて、方針を共有していくこと、その重要方針として、今5つ、ここでは掲げてあります。

そして、単に方針とか理念だけを言っても仕方がないので、どういう戦略、攻略をとるかということで、「方策」として、ここに5つ挙げてあります。そのほかにも、足立区も独自にいろいろな動きがあると思いますけれども、この部分について、大急ぎになりますが、事例をもとに情報提供をさせていただきます。

「重要方針」のところにありますように、ここにお越しの方たちは、古い認知症視、認知症観から脱皮して、何のためにこういう部会を設置して進めていくのか、今までの「認知症になったらもうおしまい」というような、そういう古い価値観をこえて、「認知症に早く気づいて、医療や介護や地域の力で、認知症になっても、これからは前向きに暮らそう」、従来、悲観的に見られていたけれども、「認知症に



なっても、もっといい状態で暮らし続けられる」という前向きのイメージを皆さんもお持ちになっていると思いますが、それが区民の方たちになかなか広がっていない。多分足立区もそうだと思いますが、「認知症は嫌だよな」、「認知症になったらおしまだよな」と、実際にそういう後ろ向きのイメージが強いと、初期の相談や、地域の人たちへの相談もなかなか伸びないですね。場合によっては医療、介護の専門職が前向きなイメージを持ってないと、不適切な支援とか、専門職がそばにいても専門職の力が伸びないような実態があるのではないかと思います。

そして、2番目の大事な方針としては、支援してあげるとかサービスを提供することを、提供側から情報をどんどんどんどん出しても、本人と家族にはわかりにくい。当事者の視点に立ちながら、当事者から見るとわかりやすいかなとか、当事者が使いやすいかなとか、実際に足立区で暮らしている本人、家族から見ると、何があったらいいのかという当事者の視点に徹底的に添うという点とか、あと、本人、家族さんも相当力がありますので、お世話をしてあげるとい世話をしてあげる一方の考え方ではなくて、これからは本人と家族の力をしっかりと生かしながら暮らしを安定させていっていただく、むしろ地域づくりの大事なメンバーとして本人、家族にも地域づくりに積極的に参画していただくというのが2番目のところですよ。

そして3番目ですが、地域の多様な人たちの力を生かして、それぞれがばらばらの努力では限界があるので、どれだけつながりをつくれるか。あと、支え合う、それぞれが支え合いながら無駄な取り組みをできるだけ減らして、一部の人たちに負荷がかかるのを避けていこうというような点です。

足立区でも既に活動している人たちが相当数おられると思います。それも認知症の分野に限らず地域づくり、いろいろな面で活躍されてきている方たちとどのようにドッキングしていくとか、あと、区内全体を網羅的に全部でやろうと焦らずに、小さなエリアから、いろいろな人たちが共同して動けそうな小さなエリアから始めて、1年でおしまいではなくて、2年、3年と息長く事業を続けながら、少しずつでも成果を積み上げていくことができるかどうかという点が3点目のところですよ。

あと4点目は、初期の気づきと出会いに注力をしていく。さまざまな動きがあるけれども、初期に徹底的に注力をする。これは、従来かなり状態が悪くなってから利用者が来るのを待っていた介護事業者や医療機関も含めて、専門の力を地域に向けて生かしながら、初期の方たちが早くいい状態になれるように初期支援にみんなで注力しようという点です。

5番目は、話し合っておしまいにしないで、1個、2個とアクションを始めようということ、こういうことが今、全国でも大事にされている点です。

これに沿っての具体例を次にどうぞご紹介させていただきたいと思います。

(「新キャンペーン」)

具体的な方策として、今、参考にしていただきたいのは、新キャンペーンということです。これは足立区でも、先ほどのキーホルダーを配付したり、サポーターさんを増やしたりということをいろいろされていると思いますが、認知症についてのイメージがなかなか変わらなかったり、あと何に向けてみんなが総力を挙げているのか、何をキャッチフレーズにやっているのか、どこが取り組んでいるのか、そういうことで、キャッチフレーズとかシンボルマークをつくったりしながら、あと、先ほどもサポーター講座のフォローアップを始めているというのがありましたけれども、サポーター講座の内容も、それぞれがアクションに向けて動けるように強化をしていくとか、それぞれの動きを新しい流れとして生かしていく意味で、全国各地での新キャンペーンが活発に動いてきております。

(「参考：岩手県矢巾町」「やさしさはばたく……」)

次のページですが、参考までに、これは岩手県の矢巾町の「やはば」という文字を織り込んで「やさしさはばたく認知症支援ネットワーク連絡会」を町で形成しています。まさに今日のような部会の、さらにワーキング部会で、今日のように大筋の方向性を合意したり、意見をお聞きした後、今度はどんどんアクションに入っていくワーキンググループをつくったりしながら取り組みを積極的に進めていこうと。そのときに必ず「やさしさはばたく」ということを認知症のキャッチフレーズとしてサポーター講座でも伝える。お店でも「やさしさはばたく」シールを配って、やさしいお店、サポーター講座を受けた職員がいるお店にはシールを張っていこうとか、やっていることがもっと多くの人の目に触れるような、そのような取り組みを積極的にやっている例です。

(「ジューミンジャー」)

このキャンペーンは、みんなで元気に前向きに取り組む人を増やす、関心を持ってもらえる人を増やすということで、今、子どもたちにもどんどん取り組みを広げていますが、そこで「ジューミンジャー」という赤と黒の服を着た人たちが町中を闊歩して、子どもたちに、「認知症になっても、まだまだ町で元気に暮らせる、みんなも一緒に頼んだぞ」と、子どもたちを鼓舞して、子どもたちも「近所のお年寄りのごみ出しを手伝う」とか、「学校の行き帰りに挨拶をする」とか、子どもたちも巻き込んでの地域づくりが広がっている例です。

実は、このジューミンジャーの服は、地元の裁縫サークルの人たちと、包括やケアマネの人たちの裁縫ができる人たちが、とてもお金がない中、手づくりでつくって、こういうことをやりながら、楽しくやれる仲間が増えているような例です。

(「ジューミンジャーは 地域密着型サービス事業所連絡会」)

このジューミンジャーの中身は、見えにくいですが、左下にあるように、小規模多機能の事業者さんたちが順番にジューミンジャーになってくれて、忙しい中で、何でもここまでやるんだと思われるかもし

れませんが、むしろやりながら、日ごろばらばらな事業者も、この活動を通して事業者同士がうちの町のためにもう少し自分たちの専門の力を生かそうとか、施設の中だけで働いていると疲れていく一方だけれども、地域に出るとプロとして知っていることとか、プロとしての投げかけが子どもたちや地域の人たちに非常に感謝される。自分たちの仕事というのは結構いいことをやっているんだと、見えにくい介護の役割が地域の人たちから非常に評価されて、職員たちのモチベーションが高まってきている。そういう面で、このジューミンジャーのなり手が今たくさん出てきていて、一部の人で頑張らないで、順番に行事があるたびに、あるいは呼ばれるたびに出勤しているという例です。

このように投げかけると、足立区でも介護の事業者の中で地域づくりにもっと力を発揮してくれる職員さんもいるのではないかと思います。

(「認知症はあっても、自分らしく……」)

次のページあたりからは、認知症のご本人のいい姿を通じて、認知症になってもまだまだ地域で暮らせるということをPRしている映像を用いたキャンペーンです。

これは、いろいろな町で、認知症というどうしても問題事例や大変な問題だけがクローズアップされますが、地域のケアマネさんや事業者や医療機関の情報を得ていくと、医療や介護や地域の支援を受けて比較的穏やかに生き生き暮らせている、本当にいい状態で暮らせている人も相当増えてきていると思います。

(「いくつになっても、認知症になっても、暮らしの中で」)

そういう人たちにもっともっと活躍していただいて、その姿を写真に撮らせていただいたりしながら、確かに問題も多いけれども、実はこんなふうに住ることがうちの町でも当たり前になりつつあるということ、いい姿として、ご本人と一緒にキャンペーンを張っているような例です。

実は、この中にも足立区の方が何人かいらっしゃいますが、本当にきれいごとではなくて、そのためにケアマネさんやお医者さんや医療、介護、地域の人たちが日々見えない努力を、相当な努力をしているのを、こういう実際の姿を通じて知っていただく、そういう面もあるのではないかと思います。

(「いくつになっても、認知症になっても 男性編」)

参考までに、右下のページの図書館ですが、今、全国の図書館で図書館の司書の人たちによる「認知症の人に優しい図書館づくり」が広まってきています。認知症になっても図書館に行きたい、本を読みたい。今まで長年、図書館はいい居場所として、孫と一緒に本を借りにっていた人たちも多くおられるのではないかと思います。図書館には、本の読み聞かせボランティアなどもいらっしゃったりして、今、認知症の人とゆっくりご本を読むとか、図書館の司書の人たちがデイサービスや施設、病院に本を届けて、認知症の人でも本を読みたい人が本を読み続けられるような、そんな支援も始まったりしています

ので、投げかけ方によっては、足立区にある図書館だとか郷土博物館だとか、そういういろいろな文化的な施設が認知症の地域づくりの大事な拠点になっていく面が、もっともあってあるのではないかと思います。

(「いくつになっても、認知症になっても 一人ひとり(自分は)……」)

参考までに、真ん中の写真ですが、認知症のランニングラン伴です。認知症を隠さないで、認知症になっても堂々と町の中で過ごそうということで、まだまだ歩けたり、実は認知症でも走れる方がいらっしゃって、これは、こつしは北海道から沖縄まで道路をみんなで走ったり歩いたりして、認知症を町の人にもっともって知ってもらおう、隠す時代ではないということで、認知症の人たちとリレーをしながら走ろうという取り組みです。

東京都内も9月にこの取り組みがあって、足立区からも何名か参加されるというのをお聞きしていますが、どうしても、どうしたら認知症についてイメージを変えて、元気な力を引き出せるかというところで、これは皆さんそれぞれのお立場から、このような動きがあるよということを伝えていただきながら、発想を変えていろいろな人たちの力、何よりも、認知症になってもすごい底力を皆さん秘めていらっしゃいますから、その底力を出して、症状のコントロールではなかなかうまくいかなかった人が、こういう活躍する機会をつくったら、逆に症状が緩和されてくるという逆転のやり方で、症状があるからこういう活動は余りしないということではなくて、症状のある人こそ楽しく地域と一緒に、みんなと一緒に「いい時間だったね」「楽しかったね」という場面をつくることで、本人も家族も孤立しないで、一人ではない、一緒にこうやって楽しんでくれる人がいる、そういう仲間をつくりながら、症状などもうまく乗り越えていこうとする、そういう取り組みです。

(「体が弱った人・施設で暮らす人も。ちょっと一緒に」)

その下のところですが、動けて元気な人だけではなく、施設等に入っている人たちでも、地域のサポーターさんたちと一緒に取り組みをしながら、認知症になっても地域と切り離されずに暮らしていく場面を増やすことで、グループホームや老健施設の職員だけに頑張らずに、本人さんと同時に職員さん自身の負担を減らしながら、職員さんも地域に目を開いていただいて、ギブ・アンド・テイクで地域の人は施設等へ力をかす、施設の職員は、今度は地域に力をかすという双方向での取り組みが進んでいるような例です。

(「あくまでも本人が主人公：本人を主語にして表記に……」)

次のスライド、ご参考までにですが、イメージを変えるということの中で、これは町田市の例ですが、認知症の診断を受けて、認知症になって暗いイメージであることを変えるために、「まちだ・ほほえみ街道」、認知症になっても町の中でいろいろな人たちが支えて、長い経過を、道筋をたどっていくことがで

きる、本人から見て、家族から見て、とてもホッとするような言葉をいっぱいちりばめて、地域の資源を生かすマップをつくっています。

このメッセージも、みんなで手づくりのメッセージで、「認知症になってからも、まだまだ生きる私の人生」など、そういう言葉の一つ一つが本人、家族を応援していくような、そんな言葉をいっぱい載せている資料です。今、足立区でもいろいろなりフレット等もつくられていると思いますが、このように言葉を大事にしながら、応援メッセージをいっぱい載せていこうという取り組みです。

（「町のあらゆる人が、認知症の人と家族の見守り・支え手」）

次のスライドを見ていただきたいと思いますが、本当に今、もう既にお話ししてきていますけれども、住民さんや産業界、今、町田の例をお話ししましたけれども、足立区にも本当にさまざまな企業さん、お店屋さん、移動サービス（鉄道、交通機関）やレジャー施設、カラオケだとか、あとはパチンコ屋さんとか、従来関係ないと思われていたような人が集まる場所、区民が集まる場所のあらゆるところに、認知症の人の理解者になってもらい、早めに気づいて、ちょっと心配な方がおられるというのを包括等に連絡をしてくれるような早めのつなぎ手になってもらうとか、足立区の中でも、そこにあるものをもっと大事に生かそうと、その掘り起こしを、足立区全体でやると山ほどの数になると思いますので、25ある包括ごとにとか、あるいは5ブロックごとにとか、足立区一つでは相当広域だと思いますので、エリアごとに、あるものを大事に掘り起こしながら、その人たちのつながりをつくっていこうという各地の取り組みの例です。

（「対象が専門職でも、地域住民でも、当事者でも」）

その下にありますように、専門職と住民がどれだけ一緒に話し合う場をつくれるか、専門職は専門職で忙しく動いている、住民さんは住民さんで動いているということではなくて、エリアごとに住民と専門職が誘い合って一緒に話し合う時間をつくる。それぞれ何ができるのか、あるいは既にやっていることは何か、あと、話し合っておしまいにならないで、あしたからとか、この一年間、地域でできることがないかなど、具体的に出し合って活動を始めていこう、即動こうというようなことが各地で始まっています。地域の人たちの力、専門職もすごい力がありますけれども、実は、年をとっても、認知症になっても、何とかうちの町でやっていきたいと、そういう機会をつくると住民さんたちが物すごい力を出して、話し合っているだけではなくて、行方不明の模擬訓練を始めようとか、声かけ運動を始めようとか、今ある取り組みに合流しながらアクションの流れができてきている例です。

（「矢巾わんわんパトロール隊」）

次の例は、先ほども矢巾町の事例をご紹介しましたけれども、さまざまな資源を生かした例として、犬の散歩仲間の人たちにもっと活躍してもらおうということで、犬の散歩仲間、朝晩動いている人たち

が「わんわんパトロール隊」を結成していただいて、ネームプレートをつけてパトロール隊ということで動いていて、実は、犬を介在させることで高齢者が話しかけやすい。家族さんも、ちょっと困ったことがあっても、行政とか専門職には声をかけにくかったのが、地域のこういうわんわんパトロール隊には、細かな相談がいっぱい入り始めて、実際に行方不明者の発見に貢献し始めたりですとか、地域の何ということはない散歩仲間の人が住民さんに非常に知られるようになって、包括に至るまでの相談の仲介役を始めているような例です。住民さんならでの力、これはわんちゃんも含めて、潜在力は大きいなという感じです。

(「わんわんパトロール隊とは」)

(「セラピー犬モモ隊員」)

(「道ですれ違う小中学生が……」)

(「参考：京都府綾部市 サポーターを含む関係者で、対話集会」)

その次の京都府綾部市の例は、これは、足立区でも先ほどありましたように、フォローアップ研修等に参加された人たちは、きっかけがあれば動いてくれます。講座で集まった人たちが講座で学んでおしまいしないで、対話集会をしよう。認知症になっても、こんな町だといいいねというアイデアを出し合おうということです。

(「サポーターの実践が広がっています」)

サポーターの講座の方を中心に、専門職にも入っていただいて、サポーターさんがそれなりに話の聞き役、よく話を聞く傾聴ボランティアにもなりながら、孤立しがちなおうちを訪問していこう、話の聞き役になろう、本人だけではなくて介護をされて疲れている家族さんの思い切りの愚痴を聞きながら、家族さんが少しでも息を抜ける機会をつくろうとか、認知症カフェをどんどん応援しようということで、今、足立区でも認知症カフェが地域包括ごとにつくられていると思いますが、地域包括の人たちだけを頑張らずに、住民の力で、例えば認知症カフェへの送迎につき合ってあげるとか、カフェの準備等を応援しようということでサポーターが応援している例です。

あと、認知症カフェだけでは、まだまだ場所も足りないので、サポーターさんのおうちを開放するなど、何かホッとできる場所を、自分たちの手づくりの場所をつくろうとか、特に男性は、建物の中だけではなかなか……、そういう場所には入っていきづらい人もいますが、男性でも集まることのできる機会をつくることのできないかということで、畑づくりとか、何か屋外空間を生かすと男の人も出てくるのではないかなどという男性の目線に立った集まりの場づくりをサポーターさんたちが始めてくれているような例です。

(「参考 アクションミーティング」)

こういうことを、アクションを考えるアクションミーティングが、今、各地で広がっていますので、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

(「参考例：笠間市」)

これは、茨城県の笠間市で、医師会を中心にアクションミーティングを開催されて、行政と包括、あと、かかりつけ医の先生たち、看護職や介護職、住民さんなどいろいろな方たちが集まって、医療につながりやすくするためにも、もっと気軽にみんなが集まって一緒に動けるような活動をしながら、そこにつながったちょっと心配なような人が、顔なじみの関係で医療にもつながっていけるようにというところで、お医者さんも一緒にさまざまなチームができて、今、動いていることの紹介です。

認知症といっても、集まる人が限られています。「災害が心配だね、災害があっても安心して逃げられるような防災訓練をしよう」と、認知症とは全然関係ないようですが、防災の動きから一緒に、まずは「おはよう」の声かけから始まるような、認知症という看板を一旦おろして防災訓練に連動した動きを始めながら、認知症でも災害時に逃げられるようにとか、防災ということで、そこに集まったひとり暮らしや老老の夫婦の方たちを、認知症の早期支援につなげようという動きが出ています。

真ん中の「どーぞいらっしやい!!ごはんですよ」というのは、余り難しいことよりも、おいしいご飯をたまには一緒に食べようよと、しっかりと栄養をとるということを入り口にして、食事の準備が不十分になり始めた人などは、早期の相談に入っていこうとか、一人での外出が心配な人への「ぶらり付き添いサービス」を始めようとか、左下の「ナイトクラブ」というのは、異色な名前ですが、認知症の介護が始まった家族は本当に疲れ切っています。たまには夜、家族にもゆっくり遊んでもらおう、堂々と人目を気にせずに夜の時間を楽しめるように、家族にも「娛包美(ごほうび)」のような時間を、医療関係者や介護関係者も一緒につくれないだろうかとか、下の真ん中のところですが、子どもたちにもボランティアをやってもらおうとか、専門職と住民の人が一緒になりながら、みんなが一緒に楽しみながらつながりが増えるようなアクションが始まっているような例です。

(「参考情報 (初期に)集い、つながれる場づくり」)

(「今まで、これから」)

長くなったので少し飛ばさせていただきますが、どうやったら初期につながれるのかということが最大のテーマになってくると思います。これまでは、初期の支援がない、初期になかなかつながれないために重度化して、混乱ケースになってからの支援が中心になってしまっていたけれども、これからは、できるだけ初期のつながりづくりに注力する。初期は、予防のことはもちろんですが、地域の人や保険の分野だけではなくて、介護や医療の人たちも初期の支援を強めるためにできることがないかと、みんなが初期に注力をしていこうという点です。

(「身近なところで自然につながれ、行くと楽しい……」)

身近なところでの自然なつながりで、行くと楽しいたまり場づくりということで、なじみの店先とか、あと、地元の喫茶店、飲食店の協力を得て、その喫茶店や飲食店の休日に認知症カフェを開かせてもらうことをサポーターさんや専門職と一緒に広げていったりとか、町内の集会所とか町内にある場所を借りたりとか、スーパーや薬局など企業のスペースを借りたり、本当にありとあらゆる中で、この地域のどこに集まり場所をつくと家族や本人が自然体で集まれるかということ、自分の町の見えそうな場所を、無理だと思わないで、一個一個こういうことをやってみたいのですが、というのをアタックして、そういう集まり場所をつくっている、そういう例です。

(「認知症カフェを、とことん活かそう」)

次に載せたのは、認知症カフェが地域包括で少しずつ立ち上がってきていると思いますけれども、せっかくの本人や家族さんたちが集まる場をとことん生かそうということで、本人や家族の支援、あとですが、ここにプロもどんどん入りながら、あるいは弁護士の方とか地元のいろいろな専門職にも入ってもらいながら、相談の機能を高めようとか、集まってもらったときに普及・啓発をしようとか、このカフェの場のネットワークをつくる、専門職も含めてたまり場にして、顔の見える気軽なネットワークの場にしようということ、やれる範囲で少しずつ、カフェの場をみんなで大事に育てていこうという例です。

(「参考情報 見守り・SOS模擬訓練の継続実施」)

(「町のみんで、行方不明を防ごう、無事に早く発見しよう!」)

きょうはいろいろなことをお伝えしてきましたけれども、もう一つの取り組み、今、全国で非常に注目されているのは、何とか行方不明をなくしていこうということです。足立区でも年間何名かの方が行方不明になったり、場合によっては残念ながら発見が難しいという例もあつたりするとは思いますが、行方不明になってから探すのでは効率が悪くてなかなかうまくいかないことも多いです。行方不明が出る前に見守りのネットワークを強めて、見守りのネットワークに入ってくれる人たちに、いざというときにも探す「SOSネットワーク」の一員にもなってもらって、見守りをベースにしたSOSネットワークの強化、そういう取り組みです。

(「いくつになっても、認知症になっても、外に出かけたい……」)

その下に、認知症の人が、本人が誰かに会いたかったり、散歩をしたかったり、お金をおろすために銀行に行こうとしたり、買い物、外食等、地域に出るといろいろな人たちと接点があります。認知症の人に接する関係者にサポーター講座などを受けてもらいながら、ネットワークの協力員として登録してもらおうなど、いざというときに一緒に探す仲間、ふだんからの見守りの登録メンバーになってもらい



ながら、きょうは資料をつけることはできませんでしたが、万が一行方不明が出たときに、連絡がうまく届くのか、連絡が届いたら自分の無理のない範囲で捜すことができるかどうかとか、あの人はそうかなという人を見つけたら本人に声かけをして無事に保護できるかどうか、見つけたら決められたところに通報して、発見しましたよ、大丈夫でしたよ、という連絡を回せるように、模擬訓練をやってみようという動きも活発になっています。

模擬訓練をやることで、ふだんはなかなかつながれない人たちが一堂に会して一緒に汗を流して訓練をしてみることで、見えないネットワークが見える形になり、認知症の人をみんなで守りながら、お互いがつながって仲間を増やすような町にしていこうという機運を盛り上げる、そういう模擬訓練を足立区の中でも、小さな地域からでも始めていただきたいと思います。

これは、最初の年には数名から始まった地域もありますが、やれる人、集まれる人で、最初の年は1桁だったのが、2年目には2桁になり、3年目には3桁の人が集まって、行方不明の見守り体制もちょっとずつ強まり、参加者も増えながら、生きたネットワークになっていくと思いますので、何とか足立区でもことし、行方不明に関する模擬訓練にチャレンジしていただけたらいいなと思います。

（「参考情報 自発的な推進フォーメーションを育てる」）

（「認知症地域支援推進チーム人材育成を通じて～約2年間～」）

最後のところですが、フォーメーションを育てようということで、足立区でも相当たくさんの方が関与されていると思いますけれども、みんなが忙しい中でばらばらに動くのではなくて、市を中心にしながら包括の単位、包括の中でも推進チームに入ってくれるような認知症専門員の方や、あるいは認知症地域支援推進員とか、あるいは今まで足立区で育ててきている「絆のあんしん協力員」の方ですとか、呼びかければ推進チームの仲間になってくれる人が非常に多くおられると思いますので、そういう推進チームを結成しながら、その先に認知症サポーター養成講座を受けてもらった人たちがしっかりと仲間としてチームを組んでそれぞれのエリアで、地元にあった必要な支援や活動を、この地域だとして認知症サポーター養成講座をやるといいよとか、この地域だと見守りネットワークの模擬訓練をこの人たちとならやれるかもしれないというような、それぞれの地元にあった情報で、ふだんの顔の見える関係の中で取り組みがきめ細やかに進んで、地域で暮らす本人、家族さん、本当に必要な人がつながって、早めの相談とか支援に入っていけるようなフォーメーションを、できる地域から一つ一つつくり上げていっていただきたいと思います。これは、ほかの地域（大崎市）の動きをもとにした情報提供をさせていただきました。

長時間になってしまって申しわけありませんでしたが、あと残りの時間、1時間弱ですが、今の話などをたたき台にしながら、1番は、前段で課長さんにご説明いただいた足立区の全体事業イメー

ジのA3の資料をベースにしなが、これを生かしていくために、自分の立場で、あるいは自分がいつも取り組んでいるお仲間と一緒に、ご自分の立場で今後どのようなことができるか、そのアイデア、あるいは既に自分たちの立場でこういうことを少しずつ始めているとか、そういう情報提供も含めて、それぞれの委員の方からご意見をいただければと思います。

今お伝えしたように、認知症に限らず、今まで地域の中で取り組まれてきたことが、認知症に関する地域づくりの相当大きな力になっていくことと思いますので、これまでこういうことをやっているし、これからもこんなことをできそうだとか、やれたらいいなというアイデアをぜひお話しいただければと思います。

どなたかからでも結構ですけれども、事業者の方からでも、地域の方からでも結構ですけれども、いかがでしょうか。

実は、きょう午前中、認知症の専門員の方たち、包括の方たち中心の集まりがありましたけれども、「余り何もやれていません」という声も多いようですが、よく聞くと、現場では相当いろいろな動きが……、それぞれでは業務でパンパン、いっぱいだから、一緒に情報交換をするとやれることがありそうだねと、そういう意見もいっぱい出ていましたけれども、どうでしょうか。皆さんそれぞれのお立場で、うちの事業所、団体でもいろいろな動きがあるとか、いいところ自慢も含めて結構ですので、お話しただければと思います。

事業者の方から行きますかね、一番右端の方、いかがでしょうか。よろしくをお願いします。

縄田委員 介護老人保健施設ホスピア東和の看護師長の縄田です。よろしくをお願いします。

大きなプリントの中で「認知症サポーター養成講座」ですけれども、私も受けたことがあります。皆さんもあると思いますが、内容は大変わかりやすく、認知症に対しての正しい知識だとか、かわり方とか、こんな症状ですよといったような事例を、画像を通して非常にわかりやすい内容ですので、こういったことが多くの区民の方に根づいていくといいのではないかと、個人的にも思っています。

あとは、実際に私、施設で利用者様への対応をさせていただいていますけれども、やはり関わりを多くして寄り添っていくと、認知症の方も、最初は興奮されたりすることもありますけれども、徐々にできることが多くなってきたり安定した状態が増えてきているのを感じています。そういったことをご家族様にお伝えしていくと、ご家族様もだんだん理解してきて、また家族もさらに寄り添っていけるというような良い効果も見られています。

あとは、やはり認知症になってしまった方を支えるご家族もかなり不安がありますので、そういった意味で、地域としてサポートできるようになっていくといいのではないかと感じております。

永田部会長 ありがとうございます。

老健には、しっかりかかわると相当落ち着く方がおられるというすごい実績がありますから、それを、ご家族はもちろんですが、少しずつでも地域の方たちにもお伝えして、相当強力な地域拠点にもなっていかれつつあるのではないかと思います。ありがとうございました。

順番に、お気づきのことなどをお願いします。

伊藤委員 千住桜花苑特別養護老人ホームの施設長の伊藤です。

特養というよりは、認知症対応型の通所介護を併設しておりますので、そこで千住地区の方を中心に日々ご利用いただいているところですが、地域密着型のサービスということで、運営推進協議会が、地域の方などを交えて不定期ながらも話し合いを行っています。

もともと併設するグループホームがありますので、これまでも認知の職員も一緒にかかわらせていただきながら、地域の実情などのお話を聞く機会はあったところですが、やはりそういった運営推進委員会ということで、かなり積極的に参加していただく地域の方でも、通所介護に認知対応型があったということを、まず知らなかったということが以前はありました。今は認知度も高くなって周知できていますけれども、ただ、その参加者の方からよく聞かれるのは、自分の身内がサービスを使うときに、「認知症」という言葉を遣うところで、やはりまだ少し抵抗がありますという話は、今も出てきます。

また、特に介護保険制度の改正などで一般型の通所介護でも認知対応ができるようになりましたので、認知症のある方も、どちらかという一般の通所介護をご利用になりますので、事業所としては、これから認知症対応型の、より専門的なサービス提供のあり方が必要になってくるのではないかと、今、試行錯誤しているところです。

ただ、中には一般型の通所介護から認知症対応型に移動される方もいらっしゃいますので、役割はあるのではないかとこのところですが、まだまだ認知症対応型の通所介護の周知度が低いのではないかと感じていますので、ここはちょっと力を入れていくべきだろうと思っております。

あとは、特養で、本当はあってはいけないことですが、やはり年に数回、お一人で外に出られて施設に戻れなくなるという場合があります。ただ、千住地区に長年お住まいの特養ご利用者の方は、きちんとご自宅まで戻られている場合が多いんですね。やはり住みなれた場所と言いましょか、きちんとおうちに戻られている場合が多いので、やはり昔ながらの町並みではないですが、住みなれた環境の大事さというのも、職員は日ごろ話をしているところですね。

あと、認知症カフェは、今まで言葉でもなかなか聞かなかったのですが、ここ最近、かなり耳にする頻度が増えてきましたので、皆さん各方面で認知症カフェの取り組みをされているのではないかと思いますけれども、皆さん、何かというと「認知症カフェ」、「認知症カフェ」という話も聞きますので、やはりどうしてもそこからこぼれてくる認知症の方もいるだろうということですので、これまでの制度

の中でも、どうしてもそこからこぼれてくるご利用者の方をいかに拾っていくのかというのが課題ではないかと思っております。

あとは、今、多分第6期の地域包括ケアの段階に来ていると思いますが、6期では「医療と介護の連携」に力を入れましょうというようなことにもなっていると思いますので、その辺については、ちょっと勉強不足もありまして、具体的にどのように取り組めばいいのか、まだわからないところですが、在宅で、よりよい生活ができるようにするには、介護と医療がどのように連携していけばいいのかというところが課題としてあるのではないかと考えています。

こんなところでよろしいでしょうか。

永田部会長 いいご意見をありがとうございました。

それでは、いかがでしょうか。

武田委員 通所部会の武田でございます。

通所部会として、認知症の方への対応を含めて、「質を高めていく」ことに尽きるのではないかと思っております。

先ほどお話がありましたけれども、認知症対応型の通所事業所は26事業所ございますが、足立区で200弱の通所事業所がある中で、恐らくほとんどの事業所さんに認知症の方は通所されているのではないかと思います。いろいろなタイプの通所事業所がありますので、一概には言えませんが、多く通所されているのが実態だと思います。その意味では、通所部会を挙げて通所事業所にかかわる職員の質を高める努力をしていくことができればと思っております。

また、今年度から皆葉課長を初め行政の方に大変なお力添えをいただいて、認知症の実践者研修を足立区で開催していただくことになって、通所部会としても参加させていただける格好でございますので、そういった機会を活用させていただきながら、私たちの質を高める努力を継続していくことができればと思っております。

以上です。

永田部会長 ありがとうございました。

いかがでしょうか。

浅野委員 訪問看護部会の浅野です。

私が考えたことは2点ぐらいですけども、まず、認知症カフェについてですが、足立区では、地域包括支援センターが何回か開いていますし、また、民間でも認知症カフェをやっていますけれども、ついていった人とか家族とか、そういう参加者の声を聞くと、一部でしょうけれども、例えば行ったら足し算とか引き算とかが始まって……、それで、もう行かなくてもいいかなと思ってしまうような感じで、

認知症の人が参加して、そこで頭の体操をしましょうと、足し算から引き算からあって、それができなかったときに、多分もう行きたくなくなってしまうということも考えられますので、そういう内容について、やはりカフェによってやり方は違うはずですから、違うカフェをのぞいてみるとか、意見を言い合うとか.....。

それから、本当に認知症カフェというのがどうなのか、普通の町カフェがどうなのか、高齢者が集まるだけのカフェというのはどうなのかというのを比較して、より行きやすいものを、家族が行って介護の不満を言ってストレスを解消して気持ちよくなって帰って行くのが目的なのか、せっかく開いているわけですから、その目的が何なのかというのをもう少し.....。

ちょっと話を聞いて、私はそのように感じました。そうだよなという感じで思いました。

認知症カフェが周知されていなかったり、内容を、どういう人が行けるのかと聞かれたら、聞かれたときに、誰かが、周りの人が全部答えられるとか、そういうところが必要ではないかなと思いました。

それともう一つ、認知症サポーターとか小学生向けにいろいろやっていますけれども、やはり大切なのは予防であって、「軽度認知障害」というのがA3の資料にもありますが、MCIというと軽度の認知障害、まだ認知症の病名がつかないレベルですよ。もの忘れだけは一部分あるけれども、ほかのところは障害されていないから日常生活は大丈夫ということ.....。

ある利用者さん、私が訪問に行っている利用者さんで、ご家族の方が、自分がちょっと忘れっぽいのが気になって、病院を紹介してくれないかと言ってきたことがありました。見た目は何ともなく、生活も介護もできているような状態でしたので、紹介したのですが、そうしたら、やはり病気ではないけれども、軽度の認知障害ということでした。

その方が病院に行くまでは、もし認知症と診断されてしまったらどうしようと、ほかの家族の動揺がすごかったんです。本人はちょっと心配だったから行って診てもらいたいという気持ちでしたけれども、そこで軽度認知障害という症状を指摘されてお薬が出たのですが、その後の本人の元気になったこと、元気になったこと、すごかったんですね。薬をもらって、自分は軽度の認知障害だと言われた、まだ病気までには行かない状態だと言われたら、何かが吹っ切れたみたいで、とても活発になって、生活の中で事細かに自分の行動に気をつけるようになって、家事とかいろいろなことを、今までやらなかったことまでやり始めて、そうしたら、家族も徐々に明るくなっていったという例がありました。

ですので、誰も気がつかないというのが、もうちょっと様子を見ようかなといううちに、いかに医療に早くつなげられるか、予防を増やさなければいけないと感じました。

今回、自分が接した例に関してですが、やはり誰が最初に「病院に行ってみたら」と言うか、言い出すか、その人にとって、誰が言えば言うことを聞くか 言うことを聞くと言っては言い方が悪いです

が、誰が言え、おや、やはりおかしいのかなと思うかというところが、すごく大事だと思います。

さっきも言ったように、小学生が認知症サポーター講座を受けているというのはとてもいいことで、小学生はやはり素直だから、おじいちゃんが勉強したことに当てはまってしまったりか、おばあちゃんが当てはまってしまったりところがちょっとでもあると、「ちょっとおかしいんじゃない」とお孫さん言われると病院に行くのかなとか、それだけではないですが、誰が言え一番効果があるのかなかというところはすごく重要で、家族は怖いから認知症の病名をつけられたくなくて……

永田部会長 小学生も、困った症状だからといって、「おかしい」と言ってしまうと、おじいちゃん、おばあちゃんは傷つくから、「いつまでも元気でいてね」とか「元気でいてほしいから」とか、そこら辺の言い方は本当にとても……、おっしゃったように、大事なことは、誰が、どのように言うかですね。本当に前向きに、いつ進めるかのところだと思いますね。ありがとうございます。

浅野委員 そうですね。医療にいかにか早くつなげるかというのは大切になってきますね。

永田部会長 カフェにしてもサポーターにしても、ただあればいいというのではなくて、どうあることが本人も家族も、先に進めるかというところの中身を大事にしたりとか、あと、カフェもいきなり100%はうまくいかないけれども、どうあったらよりいいものになるのか、情報交換したり、今、増えてきているけれども、わかりやすい情報としてどのような違いがあるのか、それぞれの特徴がもう少しみんなにわかりやすくなったりとか、少しずつ改良していくことの大事さみたいな、皆さんが試行錯誤でやっていることをどのようにうまく伸ばしていけるかということもありますね。

浅野委員 そうですね。ほかのカフェを見てみるとか、成功例を参考に考えるということは大切だと思います。

永田部会長 ありがとうございます。

いかがでしょうか、小川さんお願いいたします。

小川委員 協議会の訪問介護部会の小川です。

お話を伺っていて、認知症の方をどう支えていくかというのが、まずテーマだったと思いますが、伺っている中で、本人のためにどうするかという見方はもちろん大事だし、事業者の立場とすれば、専門職などを多く抱えているところで言うと、第1に考えるのは「本人のため」ということだと思いますけれども、今お話を伺っていると、認知症と診断されてしまうと困ってしまうと、ご家族やご近所の方が、それに対する恐怖心みたいなものがあるということを考えると、ご本人のためという考え方はもちろんですが、その反面として、ご本人以外、その方の近い人、周囲の人たちのため、その人たちが何を困っているのだろうかということもとらえて考えていかないといけないのではないかと思います。それが必ずしも本人のためではないこともあるかもしれないというのも、何となく感じました。

両方で考えていかないと、何か事業を考えても、周りの人が受け入れなければなかなか進まないこともあると思うので、そういう意味では、本人のため、あるいは反するけれども、本人を取り巻く周りの人のためということも同時に考えていかなければいけないのではないかと感じました。

事業所としては、行政から出されている全体イメージの中の「認知症サポーター養成講座」で、今日はおいでになっていませんけれども、居宅部会でサポーターキャラバンのお手伝いを、多分部会としてされていると思います。各事業者がケアマネジャーとしての立場でご協力しているということだと思いますので、日常の業務が大変忙しい中がかかわっているということで、恐らく「頑張らなければ」というところでやっていると思いますけれども、それが継続していき、いい結果につながっていくといいなと思います。

訪問介護で言うと、ヘルパーが町場に出て、大勢のヘルパーが稼働していますので、そういったヘルパーが認知症サポーターの養成講座をどんどん受けていくと、以前もそのお話をさせていただいた記憶がありますが、そうしていくことで、今、浅野さんが言われていましたけれども、初期のつながりで何となく力が発揮できるのではないかとと思いますが、「全体イメージ」の左上に書いてあります「認知症サポーター養成講座 119 回、4,114 人に実施」、その後の「フォロー講座は 3 回、22 名が終了」となっているので、この数字が何を意味するのかというのは、一概には言えないとは思いますが、受講する人は多いけれども、その人の活躍する場をどのように提供していくか、考えていくかというのは、少し課題になってくるのではないかと思います。

最後ですが、きょう見かけた話なので、きょうなのかきのうなのか、いつなのかちょっとわからないのですが、福岡の高校 1 年生の剣道部の子でしたが、学校帰りのバスに乗っていたら、運転手とおばあちゃんが行き先のやり取りをしていて、どうもおばあちゃんが帰りたいたい方向に行くバスではないようで、ドライバーさんは、このバスではないからおりてくれという話をしているのを聞いて、どうもまともに話している感じではないということで、その高校生の子が一緒におりて話を聞いてみると、ちょっとつかみどころがないので、家にいるお母さんに電話をしたら、お母さんが車で迎えに来てくれて、おばあちゃんの話聞きながら、たどりながら、何となくおばあちゃんの住んでいる家の近くに行ったら、そもそも認知症の方で、市にも相談しているということでしたが、いなくなったということで、市の職員もご自宅の周りを捜して、たまたま車で送ってもらっているおばあちゃんを発見できたという話がありました。

バスの運転手さんは、ほかのお客さんのこともあるし、安全配慮もあるので、一概にそれ以上の対応は難しいのかもしれないですけども、これを、高校生が「知らなあい」とやっていけば、それで終わっていたのを、一緒におりて捜した。

先ほどの矢巾の小学生の認知症サポーターではないですが、やはり小さいうちから認知症の人というのはこうだというイメージだけでも植えつけていくと、その子たちが中学、高校になっていったときに、認知症がどうだというよりも、何となく、この人は困っているのではないかと気づくことで、小さいときから何となくイメージが植えつけられているほうが、現場が動く　現場という言い方は変ですね。実際には動くという感じもしましたので、我々や行政の皆さんなど大勢がいろいろなシステムを考えるのも大事ですが、余り難しいことではなくて、ふだんの生活の中での意識づけということが大事ではないかと思えます。

それは訪問介護などでも、ホームヘルパーとかサービス提供責任者というのが事業の中でのかわりになりますけれども、そういった者たちにも、難しいことではないところで、ちょっとおかしいぞと思ったときにどうするかという程度のところからの取り組みがやっていけるといいのではないかと思えました。

以上です。

永田部会長　貴重な例をありがとうございました。

去年の部会でも、訪問介護の人たちの力をもっと生かしていくことの大事さをご指摘くださって、先ほど課長さんからご説明のあったキャラバンメイトになっていただくということで、ケアマネさんがキャラバンメイトになることで、ヘルパーさんたちの認知症サポートの力も伸ばしていただこうような、そういう動きですね。包括だけでサポーターの養成ではなくて、ケアマネさんが一緒になって包括とヘルパーさんと一緒に取り組む、今そういう体制をつくりつつある状況なのではないかと思えました。

いずれにしても、すごく数が足りなかったり、一部の人たちに頑張らせていては本当に長続きしないというのも、どなたかおっしゃってくださいましたが、長続きするための仕組みづくりの上で、今おっしゃってくださったヘルパーさんとか、地域の子どもたちも含めて一緒に意識を変えたり、そういう大事さをわかってもらって、いざというときに動けるような一員にしていくことが、システムというのが本当の意味で動くのは、人がいてくれるかどうかだと思いますので、非常に大事なことをありがとうございました。

それでは、先生いかがでしょうか。

久松委員　医師会の久松ですけれども、きょうは永田先生のお話を聞いていて、こういうこともあるんだなと、いろいろ考えさせられましたけれども、それから委員の先生方のお話もありましたが、やはり認知症のイメージは「負のイメージ」があって、診断をつけることにためらいと不安があります。実際に、初期、疑わしいというところから、医療機関にかかるまで半年以上かかるとか、もっとすごいと1年とかですが、何でこんなにかかるのかというと、やはりがんの宣告と同じようなものですね。これ



を診断されるということで、死んだのも同じみたいだと。そういう負のイメージばかりが広まっているのではないかと思います。

やはりイメージを変えなければいけないというのを永田先生もおっしゃったように、キャンペーンとか、認知症になっても大丈夫だよみたいな、いい面を広げていかなければいけないのではないかと、僕もそう思いました。

きょうのスライドの、最初一枚目のスライドの中で、認知症の経過についてのスライドがありましたけれども、経過としてはアルツハイマー型の認知症のスライドですよね。私も、患者さんに話をするときは、やはりこのスライドを……、いつかはお迎えが来るのだから、お迎えが来るまでは、ずっと初期の段階、あるいは軽度の段階で行けばいいんじゃないのと。そのためには、いろいろなサービスとか、あるいは家族のかかわり方をきちんとやってくださいねと。認知症の負の部分ばかり見てしまう方もたくさんいますので、家族に対しては、やはり教育も必要だと思いますね。

外来で聞くと、実際の生活の中でどれだけ安心して穏やかに過ごしているか、そういう視点から見ないで、もの忘れが進みました、進みましたと、そればかりを見ているけれども、実際に家の中での生活はそんなに支障はないんですね。そういう点で、やはり負のイメージが広がっているのではないかと。

私は、老人クラブで認知症についてお話をしたり、あるいは介護者教室でお話をしますけれども、やはり私としては、認知症とは、とか、診断について画像を見ながらいろいろな話をして、経過はこうなりますよみたいな話をするから、どう見ても、余りいいイメージの話はしていないだろうかと、ちょっと自分なりに反省するようなどころがあります。

だから、イメージづくり的には、私はちょっと否定的なことを進めてきていて、考え直さなければいけないのではないかと考えております。

以上です。

永田部会長 ありがとうございました。

先生たちが、冷静に、客観的な症状とか、進行と同時に、おっしゃったように生活をよく見ると、まだまだ大丈夫な点があるよというのを一言言ってくださったら、かかりつけ医の先生とかいろいろな先生たちが、そういう前向きなイメージを広げていただく方たちが増えたら、随分違ってきますよね。ありがとうございました。

お待たせしました。いかがでしょうか。

茂出木委員 民生委員の茂出木でございます。

私たち民生委員は、今後も「孤立ゼロプロジェクト」や「絆のあんしんネットワーク」への協力を通じて早い段階、早期に認知症の疑いのある人や、心配な人に気づいて、地域包括支援センターにつない

だり、認知症高齢者支援事業などを紹介していきたいと思っております。

まずは、自分たちを含めて認知症に対する理解を深め、なるべくそういうことを話題にして町の中でも認知症ということを広める意味でも話題にしていかななくてはと思います。

認知症の人が閉じこもらないで済むような町にしていくためにも、家族の人がもっとオープンに、うちのおばあちゃんはこんな状態なんだけど、というようなことを話題にできるようにしていかなければいけないと思いました。

あと、自分の町ですけれども、ある家族の方が、おばあちゃまが徘徊をされていました。その方は、「いろいろなところに出ていってしまうので困っているのによろしくね」と、声をかけてくれていました。そのおばあちゃまは、コンビニなど、行くところが大体決まっていたので、地域の方に何度も連れてきてもらっていたんですね。家族も、まあ出かけただけど、大体行くところは決まっているから戻ってくるでしょう程度に、割とおおらかな気持ちでとらえられている家族でしたので、やはりオープンにできるような状況をつくれたらいいのではないかと思っております。

あと、不安を抱えている認知症の方が、町へお買い物などに出て、さあ私はどこにいるのかしらと不安になってわからなくなってしまうというような場面を、テレビなどでも何度か見たり、話にも聞いたりして、そういう方たちが、出かけても大丈夫だと思えるようになるにはどうしたらいいのかなと思ったときに、今オレンジキャンペーンということでオレンジがあるので、何かオレンジのマークみたいなものがお店や家などにあって、この人は何かのときには、方向がわからなくなったときには協力してもらえる、このマークがついているおうちだったら……、そういう協力してもらえる人を増やしていくことも、安心できるまちづくりの一つにならないかなと、自分としては漠然と考えています。

認知症カフェも、自分の町でもオープンして、まだできたばかりですけれども、ちょっと「認知症カフェ」という「認知症」とつくのが何かおかしい、どうも抵抗があって、「認知症カフェがありますけれども行ってみませんか」と言うときに、何か別の呼び方はないのかしらとか、ちょっと考えていましたけれども、でも、一番わかりやすいのはこれだし、その辺でちょっとどんなものかなと、現在は思っております。

そんなところです。

永田部会長 いろいろな側面からありがとうございました。

今、各市町村、「認知症カフェ」という事業名は一応持ちながらも、どういう名称だったら一番敷居が低くて来やすいかと、そういう名称からの話もあって、変えているところはあつたりするので、今、始まっているものを大事にしながら、本当に今のままの名称でいいのか、愛称をつけるのかなどというのも、今後の課題かもしれないですね。どうもありがとうございました。

いかがでしょうか。お待たせしました。

内藤委員 シルバー人材センターの内藤と申します。

私どもは、家事支援あるいは認知症の予防とか、そういう立場でございますので、シルバー人材センターにおいては、介護あるいは認知症の予防についての可能性についてお話をさせてもらいたいと思います。

先ほどA3の資料をいただきましたが、ここに「元気な高齢者」から、右のほうに「重症化患者」までの4段階に分けられているわけです。シルバー人材センターに加盟する人は、この「元気な高齢者」として入会をしております。ただし、入会されているのは、65歳以上が圧倒的でございます。現在3,500名おります。そのうち後期高齢者と称する75歳以上が、約1,700名いるということですから、典型的な高齢者の集まりでございます。先ほどのチェックリストを例にとりますと、少なくとも計算上は、この中で300名程度の認知症の方がいても不思議ではないと、そういうことですが、大半の方は、現在元気に働いております。

私、全ての人に面談をしているわけではございませんが、私の知る限りでは、私の目から見ても明らかに軽度の認知症ではないかと思われる方もいらっしゃいますが、そういった方も大きな支障なく身体的な活動をしたり、あるいは仲間といろいろな行事を行っております。

そういうものを観察しておりますと、進行する方は大変少ない感じがします。むしろ現状維持か、あるいは回復しているのではないかと思うような場面にも、私は会うことがしばしばございます。

私の主観ですが、少々のことであっても働いたり仲間と一緒にいたり、あるいは何か新しいことに挑戦していけば、この認知症というのは、かなりの部分で予防とか、あるいは維持ができる可能性を信じたいと思っております。

したがって、認知症であることを認めることも一つですが、医学的にはともかくとして、仲間として考えていけば、余り認知症というレッテルを張らずに普通の健常者と一緒に組織の中にあることが、恐らく本人にとっても家族にとってもいいのではないかなと、そんな思いでおりますので、私も立派な後期高齢者でございますが、生涯、できるだけ身体活動の伴うことをしていきたいと思っております。

私からは以上でございます。

永田部会長 ありがとうございます。

きょうは残り時間がなかったのでお話しできなかったのですが、今、全国的に、認知症があっても働くことで、今おっしゃったように、今の状態を維持したりとか、本人が張り合いを持続けての、本人自身の存在感を自分で持ち続けることの大事さが言われておりまして、まさに内藤さんがおっしゃられたことは、そのとおりだと思います。その中でも、緩やかに、早目に、特にご家族や本人がもし必要と

していれば、医療なども緩やかに繋がるとか、シルバー人材の方たちの中から、本当に早めに気づいて、働きながらも医療や介護をうまく利用しているみたいなの、そういういい例が出てくると、皆さんも足立区のモデルになるのではないかと感じました。

軽度かなと思えるような方がかなりいらっしゃるのであれば、それを維持し続けるためにも、うまく相談を使ったり医療を使うみたいなの、そういうケースが前向きに出てくるといいのではないかと思いますね。どうもありがとうございました。

シルバー人材などつながると、今、事業所の相談に来ている方なども、働くことにつながると元気が出る方もいらっしゃるのではないのでしょうか。今デイサービスに通いながら働く支援がシルバーボランティアとか、ワンコインをもらおうということをやると、男性の利用者が増えるとか、あと、シルバーボランティアでも、1人では働けないけれども、ワークシェアリングで1人分のコストを2人で、誰かついていてくれれば働けて、2人で1人分みたいな働き方とか、いろいろなものが出てきていると思います。

足立区でも、働き続けることは、ちょっとした収入の面でも大きいのではないかと思いますけれどもね。

内藤委員 はい。

永田部会長 ありがとうございました。

お待たせしました。お願いします。

緒方委員 あだち1万人の介護者家族会の緒方です。

家族会は、介護を抱えている方々の悩みを分かち合う会でありまして、電話相談とかお楽しみ会、講演会をやっています。電話当番のときは、昔はいろいろな悩みがあって相談が来たときに、ある程度のお答えはできないといけなかったのですが、今は包括さんにみんな流すようにしています。それで、今はとにかく電話をかけてきた方の愚痴を聞くということですね。それに専念しております。

あと、私は地域で老人クラブをやっているんですけど、今の公社住宅が建てて10年目です。入ったときには50名いた会員が、今は37名になってしまいました。あと10年たったら、若い人たちだけの団地になってしまうのではないかとということで、自治会自体も解散になってしまいました。

北千住の駅前ですから、隣に公団住宅の大きな団地がありますけれども、そこも高齢者ばかりで、うちのほうは10年たって、どうやら老人クラブも今は維持してはいて、最低の人数で助成金をいただいています。それで、資源ごみの回収とかプチテラスのお掃除をして、区からの助成金をいただきながら、敬老会とかはそれなりに盛大にやっております。

それと、あと、サロンを社協さんの応援で始めて1年半になります。名前は「はればれサロン」と言

いますが、毎月行事が違います。それは包括さん、社協、それから大内病院、警察、さまざまなところから、あとボランティアさんのギターだとか、さまざまな行事を毎月、半期、半期に決めまして、来る方全部にチラシを差し上げて、今のところ固定の人数が20名ぐらいにはなりました。

この間、老人クラブの講演会で久松先生のお話を聞いたときに、アルツハイマーのご主人を連れて来られた方がいらっしゃいました。そのご主人は、いつも奥さんと2人でサロンに来てくれますが、いつも敬礼をします。だから、奥さんに、昔はお巡りさんだったのと聞いたら、個人タクシーの運転手さんだったと言っていました。だから、ご挨拶がいつもそういう感じで、とても穏やかで、あれだけの長い時間、我慢して一番前の席で話を聞いてもらって、聞いていたのか眠っていたのかわかりませんが、そういう穏やかなアルツハイマーの方もいますので、その方もご夫婦で出てくださって、1時間半を楽しくやっています。

この2つの会を私は何年維持できるか、今、私はとにかくあと15年生きるんだと、皆さんに言っていますが、私も来年は80になりますから、頑張っています。そんなところで、団地自体の気づいたところは包括に流して、今、一番困っているのは片づけられない、10年でも片づけられなくなっています。それを包括に流して、今、包括で訪問してもらっています。

そういうことで、とにかく気づいたら包括に流すという形で、今、私は絶えず老人クラブとかサロンを通じて、そういう人を見つけて歩いています。そのような現状です。

永田部会長 ありがとうございます。

地道な動きを、よろしく願います。

すみません、時間が押してきてしまっていて、願います。

橋本委員 先ほど認知症カフェ、それぞれやっていることが、余り交流がないような感じというお話がありましたが、やはり少し大がかりな認知症カフェみたいなものをブロックごとぐらい、地域包括には5つのブロックがあるので、そこで体育館レベルぐらいのところ、例えば中学生の吹奏クラブであるとか、あるいはアーティストであるとか、そういうのを大がかりにしたような、認知症の方々が広く集まって楽しめるようなイベントみたいなものを、認知症カフェの大型版みたいなものを今後やっていく必要があるのではないかと考えています。

この間、実はここでひとり親に関してのそういうカフェをやったところ、ひとり親の方々は、お互い顔を見せ合うのは嫌なのではないかと思いましたが、かなり大勢の方が集まったので、多分認知症の方でも、そういう楽しいイベントを そのときはお笑い芸人のしずるの村上さんに来てもらったりしたのですが、そういう人が来るとか、芸能人とかも呼びながらやれば、結構大がかりにできるのではないかというのが1点です。

もう一つは、訓練はぜひ早期にやりたいと思っています。サポーターの中のフォローアップ研修に来ていらっしゃる方は、相当いろいろ意欲もある方だと思いますので、そういう方を中心に訓練をやったらいいのではないかと考えています。

最後に、JR東海で、愛知県でああいう事故があって、賠償を求められたときにどうするのかという問題があるのではないかとということで、今の高齢福祉課を中心に、足立区として、万一そういう事態があったときに区から基金で支払うような賠償代替制度みたいなものについての検討を進めているところです。

JR東海だったら泣き寝入りしてもらっても結構だと思いますけれども、JR東海ではないような中小企業みたいな工場が、例えば認知症の方によって何らかの被害を被って、認知症の家族に関しても資金力がない、工場も何らかの支援が行われないと生活が立ち行かなくなるような、そういう局面は、余り可能性はないとは思いますが、万一あった場合には、区の基金から支払うような制度設計ができないのかと、今、激しく検討しているところでございますので、また、できたら発表したいと思っています。

永田部会長 国内でも非常に先駆的だと思いますけれども、ぜひ.....。

それから、従来の発想ではなくて、模擬訓練とか、認知症の大人数でできるのかなと思ってしまいますけれども、そこで、そうは思わないで、来たい人がいるのではないかとか、やってみて、やってみながらどうかとか、それを一緒にやりたいような職員さん、現場の人など、そういうのをみんなでつくりたいけるといいですね。

ありがとうございました。

お待たせしました。よろしくお願いします。

和泉委員 時間がないのでアレですが、地域のちから推進部長の和泉と言います。今回初めてこの会に出させていただきます。

区としては何が大切なのかということで、皆さんのご意見をずっと伺っていたのですが、結局認知症というのは負のイメージばかりで、認知症になることに対する不安もあるというのはそのとおりだと思います。

なぜかというと、私の親が認知症になりまして、認知症の方を介護する家族をここ数年やっています。何が困るかということ、ずっと24時間介護をしないといけないところがあって、仕事にならない。そういうところがあって、地域包括支援センターがあるということも、数年前に初めて知って、相談に行かせてもらいました。デイサービスというものがどういうものであるかも知らなかったのですが、そこに行って感激して、今は特別養護老人ホームに偶然入ることができたのですが、そういう制度がないと、家

族は本当にやっていけない状況になってしまいます。

何が大事なのかという、認知症の方の発見なども大事ですが、先ほど浅野委員がおっしゃっていたような、軽度の認知障害のうちに発見することが大事なのではないかと思います。

それと、世間一般に、認知症というのは誰にでもおこるもので、普通に誰にでも起きて、超高齢社会になれば、その中の何分の一かはなってしまうということを、もっと国民全体が知らないといけないのではないかと思います。ふだんの生活の中で、小学生に話すのもいいですよ。認知症というのはこういうものだということをよく理解させていかないと、これから先、10年、20年、30年先になって、認知症の数がどんどん増えて、高齢者ばかりになってきたときに、そんなことは言っていられない状態になるはずですよ。ですから、そういうことが大事なのではないかと思います。

そのためには、認知症サポーターもそうですけれども、認知症というのはもっともっと身近なのだと、いうことをよく理解してもらうことが大事ではないかと思いました。

以上でございます。

永田部会長 ありがとうございます。

それぞれのお立場で共通しているのは、どのように理解を広げるのか、それも今までの「困った」という理解だけではなくて、より早い段階から気づいたり支え合いが始まると、もう少しよりよく生きていけるような、もう少し前向きなきちんとした理解と、単なる知識だけではなくて、区内にこんな場所もあるよとか、こういうつながり先があるよという生活を成り立たせるための具体情報がもっと行き渡って、あるものが利用できたり、あと、それぞれがもっと一緒になって支えていくような、足立区の総力を挙げて、少しずつでも本人と家族と、あと、やはりこれからは支援者側ももっと楽にならないと、ただ頑張ればいいという時代ではなくなってきたと思うので、そういう面でも、きょうお越しの方たちの意見は、本当にそれぞれの立場ならではの提案がいっぱいあったと思いますので、きょうのお話を聞き流さずに、区でもぜひこれを束ねて、この意見をつないで組み立てて、また委員の方たちは、区民全体に提案していったりとか、きょうの中でできそうなこともいっぱいあったと思いますので、それを施策とか事業にも即反映させていったりとか、あと、今年度の中でぜひ模擬訓練とか、それを住民さんだけではなくて事業者の中でも、そのエリアで一緒にやってみたいというような人がいたら連動させながら、ふだんの業務をお互いのつながりで少しでも楽にしていけるためにも、ぜひこういう多様な職種の方も一緒にやってみる機会を、今年度にぜひアタックというか、トライしていただけたらと思います。

まだまだ皆さん、ご意見等あるかと思いますが、これで一旦区にお戻ししたいと思います。

ありがとうございました。

江連地域包括ケアシステム推進課長（事務局） 皆さんどうもありがとうございました。

長時間にわたり、貴重なご意見をどうもありがとうございました。

今、永田部会長がおっしゃったように、それぞれの立場から、行政側もハッと気づかされるようなご意見もたくさんございましたので、本日いただきましたご意見を参考に、引き続き足立区として認知症施策の推進について考えていきたいと思っております。

次回の認知症ケア推進部会の開催は、また詳細が決まり次第ご案内させていただきたいと思っております。

以上で、本日の専門部会は終了になりますが、まず、初めに傍聴者の皆様からご退席をお願いしたいと思います。冒頭にお話ししたとおり配付資料と名札を事務局へお返しただいてからお帰りいただけたらと思っております。

本日は雨が降っておりましたので、傘等のお忘れものがないようご注意ください。

〔傍聴者：退席〕

委員の皆様、長時間ありがとうございました。

（事務連絡）

先ほども申し上げましたが、傘等のお忘れ物がないようにお気をつけください。

本日は、どうもありがとうございました。お気をつけてお帰りくださいませ。

午後3時56分 閉会